

ベスト介護 市内で2施設

東洋会と潤生園

介護サービスの質と従事者の資質向上に優れた事業所を表彰する「かながわベスト介護セレクト20」に、市内から（社福）東洋会・特別養護老人ホームたちばなの里（齊藤洋子施設長）と同じく潤生園（時田純理事長）が選ばれた。

* * *

たちばなの里では8年前からEPA（日比経済連携協定）により海外から介護



入所者と向き合うEPA候補生

福祉士候補生を受け入れ、人材育成に尽力してきた。

齋藤施設長は「家族を大切にする民族性もあり、入所者と真摯に向き合っている」と候補生を評価。言語や文化の違いを越えて心を通わせる姿勢は、施設内で共通のものとして浸透している。

また同施設でいち早く

「看取り」を実践。「自然の摂理に従い、その人らしく最期を迎えられる平穏死」を提唱し、取り組んできた。介護相談員を筆頭に医師や栄養士など専門スタッフが連携し、入所者を尊重したケアプランのもと献身的に介護。寿命を全うした入所者に対しては、職員全員で尊敬の念をもって見送りし

ている。

こうした平穏死の考え方の普及活動にも力を入れ、講演会を開催。先見的な人材育成と看取りの実践、地域に根付いた運営が受賞の理由となり、齋藤施設長は「職員間で共有してきた姿勢、取組みが評価され自信になる」と喜びを語った。

* * *

「天寿を全うしてもらいたいこと」。時田佳代子常務理事のこの言葉はすなわち、潤生園もまた自然な死と看



穴部の潤生園

取りに焦点を当ててきた。

施設側の理想だけでは決して実現しないことを「最大の財産」だという職員のマンパワーで成している。穴部の施設では約60人が従事しており、1人ひとりの能力を伸ばすための年間教育計画を個人別に立案し、実行。福祉という人の命にかかわる仕事の意味、価値、やりがいを職員が理解してこそマインドの高い人材が育つと考え、盤石な基盤を醸成。それこそがサービスの質に直結すると時田さんは信じ、「人の育成をないがしろにはできない」と言い切った。

また、「どんな介護を受けるかによってその人の最期が決まる。支える側（職員）に思いがちゃんとあるから天寿を全うできるようなアプローチができるんです。人に囲まれて生まれた

のだから、人の温もりの中で自然な最期を遂げてほしい」と語り、人の尊厳をす

べてケアする姿勢を崩さず、来年で40年を迎える潤生園の未来を思っている。